

地域づくり人に 多くの感動を与えた 愛媛大会

南予での開催

四国で7年ぶりの全国研修交流会が晩秋の愛媛県南予地区を中心に開催された。今回は県都松山市を離れて、県南部の宇和島市を中心として開催された。ともすれば県中部や東部との格差が問題となる南予地域であるが、全国からの大会参加者にしてみれば、こうした機会を利用して、普段は足を伸ばしにくい南予を訪れるまたとない機会となった。

開会挨拶をいただいた加戸知事が、挨拶のなかで「5分間の挨拶のために、2時間かけて松山から来ました」とユーモラスに述べられたが、南予を何とかしたいという県の思いが込められているようであった。考えてみると、こうした集会を松山で開催するのは東京で開催するのと同様で、様々な催しの中に埋没してしまう。かえって宇和島で開催することのほうが注目度は高まったといっている。



宇和島市での全体会（トークセッション）

研修交流会に求められる専門性、 ネットワーク形成

この際、南予まで出掛けてみよう、という決心と意気込みを持ち合わせて、全国から参加した人たちは、普段から自らの地域を深く考え、抱える課題を重く受



地域づくり団体全国協議会
会長 岡崎 昌之
(法政大学教授)

け止めてきた人たちだといえる。

特に現在、地域の現場においては、若者の雇用、生活や食の安全、高齢者介護をはじめとする福祉、引きこもりやいじめなどの教育、過疎化する地域の経済復興、その他、環境、景観、医療等々、これまでもとは質的に異なる多くの課題を抱えている。これらの多くは公的市場がその解決に失敗した課題だともいえる。それだけに課題解決に取組もうとする人たちは困難を抱え、かつ解決のためには専門的な知識を必要とするテーマ群でもある。

地域づくりの研修、交流も、これまでは悩みを打ち明け、共有し、互いに連絡を取り合うきっかけ作りが主であった。しかし、地域づくりの現場がより切実な課題を抱え始めることにより、研修や交流の目的は、専門的な知識の獲得、確実なネットワーク形成等の実質的なものを期待するように、その内容が変化してきた。

愛媛のまちづくり

こうした時期、これまでより実践的に全国のまちづくりをリードしてきた愛媛県の地域づくりの現場で、今回のような研修と交流の場が持てたのは幸いであった。

振り返ってみれば、愛媛県では様々なユニークなまちづくりが展開してきた。

今回、大会実行委員長を引き受けていただいた、旧双海町の若松進一さんが主導した「沈む夕日にちよつと待ったをキーワードにしたまちづくりは、全国に衝撃を与えた。きちんと見定めれば、「夕日」までもがまちづくりの重要な素材となることを知らしめたのだった。このことに勇気付けられた地域は多い。

また内子町の町並保存を主導した岡田文淑さんも、内子町石畳の分科会や宇和島市津島町の分科会に顔を出していた。内子町の町並保存や石畳の村並保存は、その内実を吟味すればすぐ理解できることであるが、全国の町並保存の現場やグリーンツーリズムの分野において、依然としてリーダー的役割を果たしているといっている。

旧城川町の「全国かまぼこ板の絵」展覧会の試みもユニークな発想で展開している。全国から毎年2万人を越える応募者を集める仕組みは、「ギヤラリーしろかわ」の浅野幸江さんの、この試みに対する一方ならぬ強い思いがなければ継続しないことである。

まちづくりの新展開

私が参加させていただいたのは第5分科会「石畳を思う会」（内子町）であった。総勢40名の大会参加者が、内子町山間部の石畳自治会館で、熱のこもった意見交換会、懇親会を繰り広げた。

印象的であったのは、「思う会」のまちづくりをリードしてきた会長の山田定さんの脇を、首都圏からのイターン者の山岡さん、そば打ち代表の亀田さん、自然環境ホテル観察活動代表の大木さん、役場の宝泉さん等々、多くの地区の人たちが固め、それぞれが自信にあふれたとても魅力的な活動報告をしてくれたことであつた。懇親会の料理は宿泊施設「石畳の宿」を運営する「思う会」の奥さん方による美味なものであつた。また自治会長



内子町分科会（石畳自治会館での様子）

の阿部さんが、こうした「思う会」の活動を高く評価し、ちょうど車の両輪のように地域づくりに取組んでいる様子が良く理解できた。今回の愛媛大会では南予、中予、離島などで15の分科会が用意され、すべて開催できた。各分科会の詳細はまだ把握していないが、いずれも盛り上がったと聞いている。



他分科会での様子

このことは1980年代から90年代にかけての、特定のリーダーが懸命に牽引するまちづくりから、そのリーダーを支援する幅広い活動グループが愛媛県では育ってきたことを意味することではなからうか。今後の愛媛のまちづくりに期待したい。